共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約480点余りにおよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。さらに1997年度には、「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、2000年度には、「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」、2005年には、「言語の構造的多様性と言語理論」が組織されました。

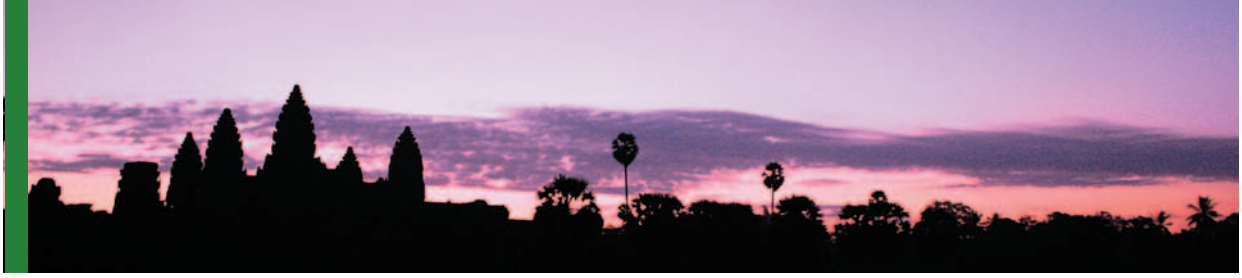
さらに2000年度からは、究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。これまでに、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」などが実施され、2006年度は所外の研究者を代表とするプロジェクトが２つ実施されます。

現在進行中のプロジェクトは次のとおりです。

（単位：万円）

	プロジェクト名	年度	主査／所外代表	人数			主に関連するユニット／センター	予算
				所内	所外	合計		
重点	言語の構造的多様性と言語理論 ー「語」の内部構造と統語機能を中心に	'05-'09	中山俊秀	6	5	11	言語動態	250
一般	朝鮮語史研究	'05-'08	伊藤智ゆき	2	9	11	情報資源戦略	52
	宣教に伴う言語学	'06-'08	豊島正之	1	3	4	情報資源戦略	53
	イスラーム写本・文書資料の総合的研究*	'03-'06	羽田亨一	5	23	28	コーパス	120
	地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究	'04-'06	中谷英明	11	47	58	コーパス	240
	中国系移民の土着化/クレオール化/ 華人化についての人類学的研究	'03-'07	三尾裕子	2	19	21	文化動態	120
	人類社会の進化史的基盤研究（1）	'05-'09	河合香吏	3	15	18	文化動態	60
	表象に関する総合的研究	'06-'08	高知尾仁	4	7	11	文化動態	32
	マルセル・モース研究ー社会・交換・組合	'06-'09	真島一郎	3	4	7	文化動態	62
	東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」*	'04-'07	黒木英充	4	21	25	文化動態/FSC	75
	マレー世界における地方文化*	'05-'09	新井和広	5	21	26	文化動態/FSC	150
	ムスリムの生活世界とその変容 ーフィールドの視点から*	'05-'09	大塚和夫	8	31	39	文化動態/FSC	232
	ドイモイの歴史的考察	'04-'06	栗原浩英	2	7	9	政治文化	30
	「植民地責任」論からみる 脱植民地化の比較歴史学的研究	'04-'06	永原陽子	1	22	23	政治文化	100
	東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10	中見立夫	3	33	36	政治文化	50
	タイ文化圏における山地民の歴史的研究 ー総合的概念を確立するための手法開発	'06-'10	クリスチャン・ダニエルス	4	6	10	政治文化	85
	形態・統語分析におけるambiguity（曖昧性） ー通言語的アプローチー	'05-'06	呉人徳司	7	25	32	言語動態	200
所外代表	インドネシアの国語攻策と言語状況の変化	'06-'07	森山幹弘	2	7	9	政治文化	62
	音韻に関する通言語的研究	'04-'06	梶茂樹	12	48	60	言語動態	150

＊は、中東イスラーム研究教育プロジェクト（p. 26）とも関わりを持つプロジェクト。



共同研究プロジェクト

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論
―「語」の内部構造と統語機能を中心に

「語」は人間言語に普遍の重要な構造単位・ドメインであることは異論の余地のないところである。しかしながら、最近の統語法中心の理論的言語研究の中では、「語」といえば、それが対外的に持つ統語機能ばかりに関心が払われ、「語」に直接焦点が当てられることはあまりなかった。これまで広く研究されてきた西欧大言語では文法体系における統語法の機能的役割が比較的大きいことも、この研究上の偏りを後押しした部分があろう。

「語」は通言語的には、内的構造の上でも、統語的性質の上でも幅広い多様性を見せ、それゆえ、文法体系の中において「語」というドメインが担う機能的役割も言語によって大きく異なる。

そこで、本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」について通言語的に適用しうる定義を確認し、そのうえで、「語」が通言語的に見せる構造的多様性（内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性）および機能的多様性（統語法との間の役割分担のあり方の多様性）の幅を探る。さらに、そこでの議論を基盤に、文法システムにおける形態法の位置づけ、形態法と統語法との関係という一般言語理論上の問題を考えていく。

[主　　査]	中山　俊秀		
[所　　員]	澤田　英夫	呉人　徳司	塩原　朝子
[所　　員]	荒川慎太郎	星　　泉	
[共同研究員]	風間伸次郎	角谷　征昭	児島　康宏
[共同研究員]	長崎　　郁	渡辺　　己	

中国・新疆ウイグル自治区阿克陶県ウジュマ郷のコンサク・マザール（イスラーム聖者廟）
撮影者：菅原純

クワギュトル族の伝統的デザイン
（カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、クワドラ島にて）撮影者：中山俊秀

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

形態・統語分析における ambiguity（曖昧性）—通言語的アプローチ

言語の形態・統語分析においては、ambiguous な現象、すなわち、同じ構文や形態についていくつかの異なる分析が可能である現象がみられることが珍しくない。こういった現象の詳細な検討は、特定の言語の記述に必要であるだけでなく、形態・統語理論における基本定義や、言語分析の方法一般、ひいては形態・統語構造の比較（歴史）研究においても、重要な意味を持つ。

本共同研究プロジェクトでは、アジア、太平洋地域の言語、アフリカの言語、またアメリカ・インディアンの言語、さらにはヨーロッパの言語を研究対象としている多くの専門家をメンバーとし、さまざまな言語における ambiguous な具体例を持ち寄り、詳細を検討することを目的とする。全体として最終的にひとつの結論に到達することを目指すのではなく、異なる分析方法や視点をぶつけあうことで、参加者がそれぞれの研究内容を向上させられるような研究会を目指す。

言語の記述にあたっては、対象言語にみられる文法現象が例外なく記述された文法規則にあてはまるのが理想的な状況であるといえよう。ところが現実には、定義のはざまにおちこむさまざまな現象がみられる。たとえば、形態・統語論面において二通り（またはそれ以上）の分析が可能であることは珍しくない（例：モンゴル語の特定の構文の使役分析と受動分析、フィリピン諸語の統語構造のフォーカス分析と能格分析）。一方、通言語的にみると、同じ用語で記述されたものでも実質が異な（ってみえ）るものもある（例：タイ語における「語」とアメリカ原住民語における「語」）。

それぞれの現象は文法記述（文法理論）における定義の多様性に起因するものなのだろうか、もしくは文法現象の歴史的変化を反映しているのか、それともそこにはこれらと性質の異なる言語に関する事実が隠れているのだろうか？

本プロジェクトでは、文法記述において先行研究における定説とは異なる分析がより適切であったり、データが定義にすっきりと当てはまらない具体的な例をとりあげ、具体的なデータを見ながらその示唆する内容について考察する。このために、類型論的にも地理的にも多様な言語を専門とする研究者をメンバーとする。

[主　　査]	呉人　徳司			
[所　　員]	塩原　朝子	荒川慎太郎	澤田　英夫	
	中山　俊秀	ペーリ・バースカラーオ		
	星　　泉			
[共同研究員]	梅谷　博之	大角　翠	奥田　統己	
	風間伸次郎	マーク・カンパナ		
	菊澤　律子	北野　浩章	桐生　和幸	
	栗林　　裕	小森　淳子	佐々木　冠	
	沈　　力	鄭　聖汝	角田　太作	
	當野　能之	中村　　渉	野瀬　昌彦	
	林　　徹	プラシャント・パルデシ		
	匹田　　剛	箕浦　信勝	山田　久就	
	米田　信子	ロバート・ラトクリフ		
	渡辺　　己			

スーダン東部、ハムシュコーレーブ地域に、1950年頃にモスクとクルアーン学校（ハルワ）を創設した宗教者、アリー・ベターイの廟。撮影者：大塚和夫

表象に関する総合的研究

このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の三点について研究を行う。

（1）「表象としてのX」・・Xには、他者、土地、場所、宗教（神、死者等）、自然（風景、動植物等）、政治、などが考えられ、それらに関する具体的な研究。
（2）表象に関する理論的、精神史的研究。
（3）表象媒体に関する認知科学的研究。

[主　　査]	高知尾　仁			
[所　　員]	深澤　秀夫	真島　一郎	小田　淳一	
[共同研究員]	浅井　雅志	荒木　正純	今村　真介	
	彌永　信美	齊藤　　晃	田中　純男	
	原　　毅彦			

「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究

本プロジェクトは、ヨーロッパ諸国とアフリカを中心とする旧植民地との歴史的関係において、植民地支配および奴隷貿易のもたらした損害に対する補償や謝罪の問題が双方の当事者の間でどのように論じられ扱われてきたかを検討することをつうじ、脱植民地化過程の段階・特質を明らかにすることを目的としている。そのさい、日本＝アジア関係などを念頭においた比較史的観点を重視しながら、戦争責任論の中から生まれた「人道に対する罪」概念を援用し、「植民地責任」概念を提起しようとしている。アフリカにおける植民地支配はその前史としての奴隷貿易の歴史と不可分であるため、「植民地責任」概念は、必然的に、奴隷貿易の歴史にもかかわって敷衍されることになる。最終的には、この概念を用いて近代世界史の構造の中での脱植民地化過程とそれをめぐる歴史認識をアジア・アフリカの側から照射することを目指している。

南アフリカ共和国ケープタウン沖、ロベン島（ネルソン＝マンデラらの収容されていた監獄島）のモスク　撮影者：永原陽子

本プロジェクトは、研究所のすすめる三つの研究内容のうち、「地域生成に関する研究」にかかわるものであるが、「地域」を一つの限定された領域としてではなく、関係性の概念としてとらえようとしている。近年の旧植民地地域からの「補償要求」などの運動は、当該地域の人々の植民地支配の歴史についての認識を示すものであり、それは旧植民地領有国における歴史認識との相互関係の中で形成されている。

本プロジェクトは、アフリカ旧植民地を中心に据えつつ、日本＝アジア関係を重要な参照枠とすること、また奴隷貿易をも射程に入れた長期の歴史的視点をもつことで、従来の地域研究で、ともすれば後景に退きがちだった世界史の構造の問題に意識的にかかわり、また現代世界の中で具体的な解決を求められているテーマについて、歴史学的な立場から認識を深めようとするものである。

南アフリカ共和国ケープタウン近郊の高校、教室風景　撮影者：永原陽子

そのような意図から、本プロジェクトではアフリカ史研究者、ヨーロッパ帝国史研究者、ラテン・アメリカ史研究者、日本・アジア史研究者を糾合した「地域研究」の新しいスタイルを試みている。また、若手研究者、とくにPD層から大学院生を含む研究者を目指す人々を中心に組織し、プロジェクトをつうじて若手研究者を育成しつつ新しい共同研究の成果を挙げることを目指している。

本プロジェクトは科研費プロジェクトを兼ねており、年４回の研究会のほか、共同研究員の現地調査も並行して進めている。最新の現地調査の結果を持ち寄って研究内容を豊かにすることは、本プロジェクトの重要な内容である。最終的には、成果を商業出版で公表することを目指している。

[主　　査]	永原　陽子			
[共同研究員]	浅田　進史	網中　昭世	飯島みどり	
	大峰　真理	小山田紀子	尾立　要子	
	柴田　暖子	清水　正義	鈴木　茂	
	高林　敏之	旦　祐介	中野　聡	
	浜　忠雄	平野千果子		
	舩田クラーセンさやか		前川　一郎	
	真城　百華	溝辺　泰雄	吉澤　文寿	
	吉田　信	渡辺　和仁	渡辺　司	

ナミビア・ウィンドフークの旧黒人居住区の子供　撮影者：永原陽子

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

[主　　査]	中見　立夫		
[所　　員]	クリスチャン・ダニエルス		栗原　浩英
[共同研究員]	赤嶺　　守	石井　　明	石川　禎浩
	井上　　治	井村　哲郎	江夏　由樹
	岡　　洋樹	岡本　隆司	笠原十九司
	加藤　直人	川島　　真	貴志　俊彦
	岸本　美緒	楠木　賢道	佐々木　揚
	新免　　康	菅原　　純	寺山　恭輔
	西村　成雄	萩原　　守	浜下　武志
	原　　暉之	平野　　聡	ブレンサイン
	細谷　良夫	松川　　節	松重　充浩
	毛里　和子	森川　哲雄	柳澤　　明
	吉澤誠一郎	吉田　豊子	

タイ文化圏における山地民の歴史的研究 ー総合的概念を確立するための手法開発

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー(ビルマ)、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの６ヵ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの六つの近代領域国家に同化を強要されはしたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形成を再解釈することである。

センジュムのわんぱく坊主　ミャンマー(ビルマ)シャン州、チェントォン、センジュム村にて。撮影者：唐立

このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。これまで山地民が果たした歴史的役割を重視しなかった理由としては、以下の２点が挙げられる。第一に歴史家は、この6ヵ国における近代国家の建国に貢献した文化や民族が果たした役割を強調する視点から歴史を再構築してきたが、山地民は貢献度が少ないため等閑視されてきた。第二に、研究者は各民族集団の固有な文化と歴史の解明を目的に、個別的に研究してきたため、山地民が共通に経験してきた歴史という視点が見落とされてしまった。夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的な理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

山地民の歴史研究には史料的な制約があり、先行研究も乏しいため、プロジェクトの運営上以下のような措置をとる。山地民の多くは自己の文字を有しないので、盆地のタイ系民族や、中国とビルマ王朝の史料、及び西洋人など、外部の人間の手による資料に依存せざるを得ない。そのため歴史学者以外にも言語学や文化人類学などの専門家の参加によって学際的なアプローチを採用する。さらに、1年目ではコアメンバーの共同研究員で、山地民の歴史を構想する枠組みを作り上げ、2年目以降その枠組みに沿う形で共同研究員を増やして研究を進行させる。なお、本プロジェクトは、昨年度から開始された科研費基盤研究B「言語・文化調査に基づくパラウン史の解明」と連携し、現地調査を踏まえた事例研究の分析も行なう。

[主　　査]	クリスチャン・ダニエルス			
[所　　員]	中見　立夫	新谷　忠彦	陶安あんど	
[共同研究員]	飯島　明子	樫永真佐夫	片岡　　樹	
	加藤　高志	小柳　美樹	山田　敦士	

センジュムのわんぱく坊主　ミャンマー(ビルマ)シャン州、チェントォン、センジュム村にて。撮影者：唐立

イスラーム写本・文書資料の総合的研究

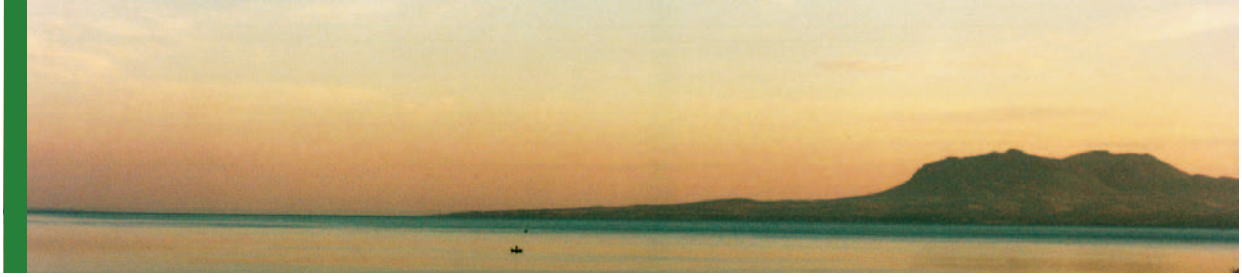
イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する

[主　　査]	羽田　亨一			
[所　　員]	近藤　信彰	飯塚　正人	中見　立夫	
	マンスール・セファトゴル			
[共同研究員]	赤坂　恒明	秋葉　　純	磯貝　健一	
	江川ひかり	大河原知樹	大稔　哲也	
	小野　　浩	川本　正知	久保　一之	
	後藤　敦子	清水　和裕	高松　洋一	
	中町　信孝	林　佳世子	前田　弘毅	
	真下　裕之	間野　英二	守川　知子	
	森本　一夫	家島　彦一	矢島　洋一	
	山口　昭彦	渡部　良子		

スーダン東部、ハムシュコーレーブ地域にあるクルアーン学校(ハルワ)で学ぶ学生たち。同校にはスーダン各地から多数の学生が集まってきている。撮影者：大塚和夫



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究

現代世界は、一方では物心両面における比較的豊かな生活を保証すると同時に、他方では紛争・貧困・地球環境・疫病などきわめて大規模かつ深刻な問題を惹起している。これらの問題は互いに連関しているから、個別的対症療法は効果が限定的であり、新たな問題を引き起こしかねない。したがって、先ず地球文明がいかにあるべきかという明確な未来像が必要である。そしてそのためには、相互影響し合いつつ刻々に変化する複雑なこの世界を、自然・世界(共同体)・人間の３層において正確に理解しなければならないであろう。往時には一人の哲学者が担ったこの現状俯瞰と新しい世界構想の営為は、科学の加速度的進展と諸地域の急激な変化を伴う今日の世界においては、一人の研究者が遂行することが殆ど不可能となっている。それは人文・社会・自然の研究者の共同研究として、はじめて可能であろう。このような人文科学の新領域を「総合人間学」と呼びたい。

本研究は、以上の認識のもとに、「総合人間学」―自然と社会(地域)に関する最先端の知を集約し、それら諸現象の人間的価値を諸文明の精神伝統に照合して再検討しつつ、新しい世界観・人間観・倫理観の確立を目指す「共同研究の場」―の創出を模索するものである。

平成18年度研究計画

(１)第３回総合人間学国際シンポジウム　平成18年12月。招聘外国人講演者３名・日本人講演者２名

(２)研究会:２回(平成18年初夏　平成18年12月・シンポジウム期間中)

(３)総合人間学を確立するため、継続してフランスのMaison des Sciences del'Homme (Paris)、アメリカのHarvard Round Table (Harvard大学)との共同研究を実施する。

[主　　査]	中谷　英明		
[所　　員]	峰岸　真琴	宮崎　恒二	芝野　耕司
	羽田　亨一	町田　和彦	高島　　淳
	飯塚　正人	床呂　郁哉	荒川慎太郎
	伊藤智ゆき		
[共同研究員]	池内　　了	池田　知久	池本　幸生
	石堂　常世	市川　　裕	逸身喜一郎
	内堀　基光	内山　勝利	大津　　透
	丘山　　新	小川　正廣	柿木　隆介
	笠井　清登	桂　　紹隆	加藤　進昌
	河井　徳治	行場　次朗	黒田　　彰
	新宮　一成	杉下　守弘	杉本　良男
[共同研究員]	関根　清三	立木　康介	恒川　恵市
	手島　勲矢	中島　隆博	中島　秀人
	長野　泰彦	西川　昌弘	納富　信留
	信原　幸弘	林　　信夫	林　もも子
	原　洋之介	日高　敏隆	廣瀬　通孝
	広田　光一	寶珠山　稔	松尾　剛次
	丸山　　徹	三木　雅博	村上　征勝
	守屋　彰夫	矢野　　環	池本　幸生
	後藤　敏文	塩月　亮子	小島　　穀

朝鮮語史研究

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということはなかった。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

2006年度は、年２回の研究会を企画する(１回に１～２名程度の研究発表を予定)。また(現在科研費申請中の)朝鮮語語基データベース・中期～近代語篇(KRMORPH)と連携し、該当webサイトに本プロジェクトのコンテンツも盛り込む計画であり、それにより研究成果の公開及び朝鮮語史研究の中核形成を目指す。

[主　　査]	伊藤智ゆき		
[所　　員]	荒川慎太郎		
[共同研究員]	伊藤　英人	門脇　誠一	岸田　文隆
	趙　　義成	陳　　南澤	辻　　星児
	南　　潤珍	福井　　玲	藤本　幸夫

宣教に伴う言語学

「宣教に伴う言語学」とは、所謂「大航海時代」のキリスト教布教に伴う言語研究活動を指し、英語では既にMissionary Linguisticsの語で定着している。

主たる資料となる文献は、16〜17世紀のスペイン・ポルトガルによる宣教活動に伴って生産された文法書、語彙集、辞書・字書、教義書、修徳書、その他の布教関連書籍、及び関連歴史文書(規約、年報、報告、書簡など)である。

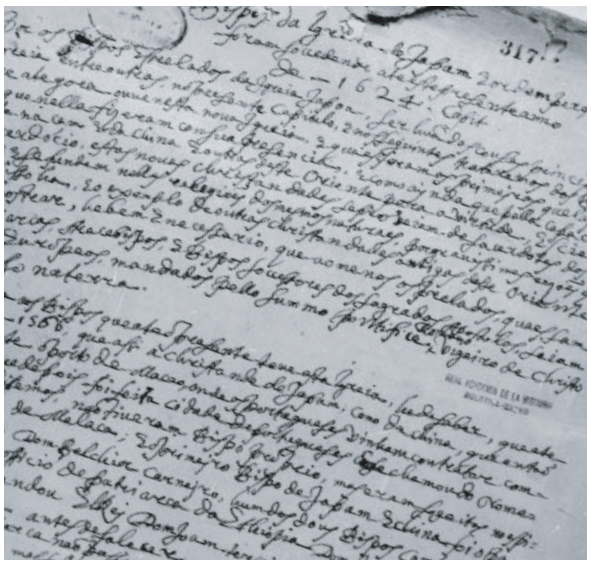
プロジェクト研究の目的は、次の通り。

(1)従来の日本の「キリシタン文献研究」の成果を以て、国際的な「宣教に伴う言語学」の共同研究活動の水準の向上に寄与する。

(2)対訳辞書類に重点を置き、15−17世紀のスペイン・ポルトガルに於ける辞書編纂史、同時代の日本に於ける辞書・字書編纂史を基礎とし、日本語以外の他の言語(例:コンカニ語)の対訳辞書も素材として、辞書編纂史・語彙研究史の論点を整理する。

(3)宣教活動に伴って生産された各国語の文法書類の文法カテゴリーの仕分け・対照等の対照研究、関連歴史文書類の書誌学的研究など、従来の日本の「キリシタン文献研究」の延長上にありながらも殆ど手つかずの状態にある領域に踏み出す。

[主　　査]	豊島	正之			
[共同研究員]	岸本	恵美	白井	純	丸山　徹



中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

本研究では、海外中国人(本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる)を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像(華人／チャイニーズ・クレオール等)や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1)従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。

(2)ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化(華人化)」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にではなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分が、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨象されたことを明らかにする。

(3)土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。なお、本プロジェクトは、平成16年度より開始された科研費基盤A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。今年度は、科研費プロジェクトと合同で海外の研究者を招聘して、研究会を開催する予定である。

[主　　査]	三尾	裕子			
[所　　員]	西井	凉子			
[共同研究員]	赤嶺	淳	板垣	明美	市川　哲
	甲斐	勝二	紀	宝坤	桑山　敬己
	貞好	康志	末成	道男	菅谷　成子
	芹澤	知広	田村	和彦	田村　克己
	中西	裕二	信田	敏宏	舛谷　鋭
	宮下	克也	宮原	曉	山本須美子
	王	維			

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

ドイモイの歴史的考察

ドイモイ(刷新)政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策(政治・経済・軍事・外交・文化等)、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。同時にその問題点も顕在化しつつあり、今やドイモイを総括すべき時期に入っているといってよい。

しかし、この間にドイモイを対象とした研究はどれほど進展したといえるだろうか。国内外のドイモイ研究に目を向けると、分野ごと(政治、経済、外交、軍事、法律など)のアプローチや各種調査の類が多く、ドイモイの全体像が見えないものが多い。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の２点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、(1)ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、(2)レ・ズアン時代末期（1979年－85年）の一連の改革政策(通貨改革、農業における生産物請負制など)とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する(した)事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要性があるのではないかということである。具体的な事例としては、(1)ドイモイの始動段階におけるソ連のペレストロイカとの関連性、(2)中国の改革・開放政策とドイモイの関連、(3)開発独裁体制との類似性などがあげられる。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざそうとするものである。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。具体的なテーマとしては、(1)ドイモイの起源に関わる諸問題(南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響)(2)ドイモイ以前の旧体制＝集団主義体制の構造を明らかにするとともに記録する、(3)ドイモイにおける根幹部分と付随的な部分は何か、(4)ドイモイにおける社会主義的性格はどこに残存しているのか、があげられる。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。比較の対象としては、中国の改革・開放政策・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国(旧ソ連、東欧など)、インドネシアの開発独裁体制が想定されるが、比較するための基礎を厳密に定義するとともに、体制間の接触、相互作用にも注意していく。

[主　　査]	栗原　浩英		
[所　　員]	根本　　敬		
[共同研究員]	石井　　明	加藤　弘之	白石　昌也
	鈴木　基義	竹内　郁雄	古田　元夫
	今村　宣勝		

マレー世界における地方文化

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画はいくつかの関連事業を有する。2006年度においては、2005年度のインドネシア文献学に関する研修に続き、ジャワ文献学セミナーを実施し、専門研究者の育成、再訓練を行う。

[主　　査]	新井　和広		
[所　　員]	宮崎　恒二	塩原　朝子	床呂　郁哉
	ティティク・プジアストゥティ		
[共同研究員]	青山　　亨	奥島　美夏	川島　　緑
	久志本裕子	国谷　　徹	黒田　景子
	小林　寧子	塩谷　もも	篠崎　香織
	菅原　由美	坪井　祐司	東長　　靖
	冨田　　暁	中田　　考	西　　芳美
	西尾　寛治	オマール・ファルーク	
	服部　美奈	水上　　浩	山口　裕子
	山本　博之		

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動(Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進められている。

[主　　査]	黒木　英充		
[所　　員]	飯塚　正人	小田　淳一	床呂　郁哉
[共同研究員]	臼杵　　陽	小副川　琢	粕谷　　元
	北澤　義之	栗田　禎子	佐藤　幸男
	土佐　弘之	長沢　栄治	中村　妙子
	間　　寧	堀井　　優	前田　弘毅
	佐原　徹哉	末近　浩太	澤江　史子
	松井　真子	村田奈々子	森　晋太郎
	吉村　貴之	屋山久美子	家島　彦一

ムスリムの生活世界とその変容 ―フィールドの視点から

本プロジェクトは、世界総人口の２割ほどを占めるとされる世界各地のムスリム(イスラームの信者)の生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにすることを主な目的とする。対象とする地域は、これまでのイスラーム研究において中心とみなされてきた中東のみならず、サハラ以南アフリカ、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアを含み、さらに欧米などのムスリム・マイノリティ社会も視野に入れる。

主要な研究テーマとしては、衣食住をはじめとする、ムスリムの日常生活に見られる些細な社会的・文化的現象の検討を出発点とし、それから国家や国際レベルにおける政治・経済的大状況を考察するというボトムアップ的視点、すなわちフィールドの現実を重視する社会・文化人類学や地域研究的な方法を重視する。それと同時に、イスラーム学の専門家にも参加してもらい、ローカルな場における民族誌的事実とより普遍的なイスラームの法学・神学的解釈との異同も検討する。また、今日のムスリム社会が、一方ではイスラーム復興のさまざまな兆候を見せているとともに、他方では近代化・世俗化・グローバル化などの影響を強く受けていることを考慮し、その現代的変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した拠点形成事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主　　査]	大塚　和夫		
[所　　員]	宮崎　恒二	黒木　英充	飯塚　正人
	新井　和広	真島　一郎	床呂　郁哉
	近藤　信彰		
[共同研究員]	青柳かおる	赤堀　雅幸	石原美奈子
	臼杵　　陽	宇野　昌樹	大坪　玲子
	大稔　哲也	奥野　克己	菊地　滋夫
	小杉　　泰	小牧　幸代	坂井　信三
	澤井　充生	清水　芳見	鷹木　恵子
	多和田裕司	東長　　靖	外川　昌彦
	中田　　考	長津　一史	縄田　浩志
	子島　　進	信田　敏宏	花渕　馨也
	堀内　正樹	三尾　　稔	村上　　薫
	山岸　智子	吉田世津子	中山　紀子
	高山　峰夫		

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

人類社会の進化史的基盤研究(1)

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レヴェルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を超えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあって、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがって「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱ってゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であった人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

[主　　査]	河合	香吏				
[所　　員]	床呂	郁哉	西井	涼子		
[共同研究員]	伊藤	詞子	今村	仁司	内堀	基光
	梅崎	昌裕	大村	敬一	北村	光二
	衣笠	聡史	黒田	末寿	杉山	祐子
	曽我	亨	田中	雅一	寺嶋	秀明
	中川	尚史	早木	仁成	船曳	建夫

マルセル・モース研究ー社会・交換・組合

本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めた、そのほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに位置するものとして構想された「社会société」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

とりわけ、学問形成期のサンスクリット研究から20世紀転換期の供犠論、呪術論をへて、やがて『贈与論』(1925年)で表明されることになる「交換」の民族学的モティーフが、同じ両大戦間期(=第三インターナショナル／コミンテルン期)に発表された一連の協同組合論、ボリシェヴィズム論、暴力論、ナシオン論などと、また他方における個体論、身体論、人格論、技術論などと、「社会」学的次元でいかなる理論的連関により繋がれていたかが、共同研究の中心的論点となる。

『民族誌学の手引き』の著者は、法・道徳・貨幣・革命のかなたに、どのような凝集力をそなえた「社会」の姿を夢みていたのか。それはまた、今日のアジア・アフリカ諸国における「社会」の動態と、なんらかの接点をもちうる夢だったのか。

[主　　査]	真島	一郎				
[所　　員]	深澤	秀夫	高島	淳		
[共同研究員]	泉	克典	小杉麻李亜		関	一敏
	渡辺	公三				

共同研究プロジェクト

所外代表による共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

世界の声調・ピッチアクセント言語を通言語的に考察し、その音声的基盤、体系、機能、歴史的変化（発生、消滅を含む）などを総合的に考察する。

具体的研究テーマとしては、例えば、以下のようなものがある。1）ピッチの音声的特性、2）文節素との関係、3）個々の言語における声調・アクセントの体系、4）声調の語彙的、文法的機能、5）声調言語とアクセント言語の違いおよびタイポロジー、6）通時的変化と比較研究、7）声調の発声と消滅。

世界には声調・ピッチアクセント言語は多く話されている。日本語、朝鮮語、中国語などの東アジア諸語、タイ語・ベトナム語などの東南アジア諸語、チベット系諸語、ナイル系・バンツー系などアフリカ諸語、新トランス・ニューギニア系などニューギニア諸語、アサバスカ系などアメリカ諸語などである。一見バラバラに見える個々の言語におけるそれぞれの現象も、いくつかの言語学的原理に根ざして生じていることが明らかになる。本研究はこれらの現象を様々な角度から取り上げ、人間語言語にとって声調・アクセントとはなにかを総合的考察することを目標とする。

[主　　査]	梶　茂樹〔京都大学〕		
[所　　員]	荒川慎太郎	新谷　忠彦	稗田　乃
	町田　和彦	峰岸　真琴	呉人　徳司
	澤田　英夫	豊島　正之	中山　俊秀
	星　　泉	伊藤智ゆき	塩原　朝子
[共同研究員]	阿部　優子	李　　連珠	池田　巧
	生駒　美喜	市田　泰弘	岩田　礼
	上田　広美	上野　善道	
	ドナ・エリクソン		遠藤　光暁
	大江　孝男	岡崎　正男	加賀谷良平
	加藤　昌彦	角谷　征昭	上岡　弘二
	神谷　俊郎	木部　暢子	久保　智之
	窪薗　晴夫	坂本　恭章	塩田　勝彦
	品川　大輔	清水　克正	清水　政明
	杉藤美代子	鈴木　玲子	田中　伸一
	壇辻　正剛	中井幸比古	中嶋　幹起
	中西　裕樹	中野　暁雄	長尾　美武
	長野　泰彦	新田　哲夫	早田　輝洋
	原口　庄輔	平山　久雄	福井　玲
	堀　　博文	松森　晶子	箕浦　信勝
[共同研究員]	藪　　司郎	結城　佐織	湯川　恭敏
	米田　信子		

インドネシアの国語政策と言語状況の変化

スハルト体制の終焉とともに、イデオロギーとしてのインドネシア語国語政策の下にこれまで封じ込められていた民族言語（地方語）が解き放たれ、公共の場においてより自由な言説が生まれてきている。加えて、英語や中国語が都市部を中心にして日常生活の中にこれまで以上に入り込んできている。これらの現象は、これまでのインドネシア語が担ってきた役割に変化が生じ、インドネシアの言語の様態に変化が生じていることを示唆しているように思われる。本プロジェクトでは、まず1945年の独立以降、インドネシア語が各地域社会においてどのように認識され、どのように「発展」してきたのか、インドネシア語とは何だったのかを再考することから始める。インドネシアの人々にとって国語とは何なのか、インドネシア語が国語と定められ、いかにして国語となっていった（ならなかった）のか、地域社会の言語（地方語）との関係性はどのようなものなのか。これらの問題を、言語学、言語政策、文化人類学、社会学、メディア論、政治学、歴史学、文学、アイデンティティー、グローバル化などの観点から議論していく。

また、強権的な政治体制が崩れた頃から多様なメディアを通してグローバル化の影響がインドネシア社会に浸透して（外からの動き）きているが、一方で中央に対する地方の自治権も拡大（内からの動き）してきた。外からと内からの新しい動きが、どのようにインドネシアの言語状況に変化をもたらしたのか、今後もたらしていくと考えられるのかについても議論していきたい。

[主　　査]	森山　幹弘〔南山大学〕		
[所　　員]	塩原　朝子	宮崎　恒二	
[共同研究員]	ウガ・ペルチェカ		鏡味　治也
	柏村　彰夫	白石　さや	津田　浩司
	舟田　京子		